

別科におけるオンライン授業

澤野 勝巳

2020年の年初から日本でも表面化したCOVID19の感染者の出現によって、従来SFの題材として取り上げられていたパンデミックが現実のものとなり、その脅威と直接むきあわなければならない時代となった。大勢の学生、教職員が集まる大学にとっても深刻な問題が投げかけられ、その解決に頭を悩まされる日々が始まった。

城西大学でも、学生が教室に出てこられない場合の対策として、オンライン授業を導入せざるを得なくなり、2020年度の授業開始時は開講を遅らせて授業の準備に充て、5月半ばから、対面授業と併行して、オンライン授業を開始した。大学は当初からできるだけ対面授業を維持する方針で臨んだが、感染者が急激に増え、死に至るケースも後を絶たず、蔓延防止等重点措置、そして緊急事態宣言と規制が厳しくなるにつれ、方針の徹底が進めにくい状況が延々と続いてきた。

2020年度の開講時、別科には、PowerPointで教材を作り、教室での授業に使っていた教員はいても、オンライン授業の経験者が少なかったため、まずはツールの選択から始めなければならなかった。大学全体としては、以前からWebClassが使われており、個人的にTeamsを使う教員もいたが、機器に強い別科の専任教員が情報を集めた結果、語学教育にはZoomが広く使われていることが分かり、別科ではZoomを統一して使うことに決めた。この直前、Zoomの授業に不審者が侵入するという事件が発生したが、原因究明したところ、授業担当者の不完全な操作のためと判明した。しかし、これを機会に、リスク管理の見直しも徹底される結果となった。

Zoomの採用を決めた後、Zoomの操作に慣れるため、前述の専任教員の先導で、Zoom使用法の講習会も開かれたが、筆者のようなパソコン弱者にはなかなか操作が覚えられず、便利な機能がいくつもあるのに、なかなか使いこなせていない。残念ながら、ほぼ2年経った今でも、操作ミスでおかしなところに迷い込み、出られなくなったらどうしようという不安が拭い去れないでいる。しかし、これは機械操作にはつきもので、訓練を積み重ねて、克服していくしか、解決の手段はない。

Zoomは双方向型の授業には威力を発揮する。これが語学教育の現場で広く使われる所以だが、学習者にとっても教員にとっても使い勝手がよい。大人数のクラスには不向きだが、十数人のクラスであれば、1画面を分割して、全員の顔が一斉にはっきりと映

し出されるので、とりあえず、教室で対面授業を行っているのと同じ状況が作り出せる。一人一人が互いに向き合っているのと同じなので、むしろ教室より発言が聞き取りやすくなる。また、教室で他の学生のいる前で発言するのを躊躇する学生も、Zoomでは発言しやすいようである。教室では手を挙げづらくても、Zoomの「手を挙げる」機能を使うと、ためらいがなくなる傾向がある。

対面授業と同等、あるいはそれ以上の効果が期待できるZoomであるが、弱点もある。その1つが、いくつかのグループに分けて、同時に作業をさせる時、Zoomでは、ブレイクアウトルームを使うことになるが、この際に全体が俯瞰できないことである。作業の進捗を確認するためには、それぞれのグループの中に入り込まなければならず、1つのグループの中を見ることはできても、その時、他のグループの様子が全く分からない。教室であれば、どのグループの作業が活発でないかが一目でわかり、そのグループの手当てに当たることができ、その手当の際に、ほかのグループの進捗状況も横目で観察することもできる。特に別科の場合には、ペアを組ませて、やり取りの練習をする機会が多いので、その際には誰と誰を組ませるか、どのような課題を与えるか、知恵を絞って対処するしか、いまのところ方法がない。

また、オンラインで試験を行うのも、実際にはかなり難しい。対面ならば、目視で不正行為を防ぐことができるが、オンラインではどんな手段を講じても、完全に防ぐことはできない。不正行為を行ってれば、表情や目の動きを見ていれば分かるので、WebClassに掲出した問題を、Zoomの画面に顔を出させながら解かせるという方法をとっているが、この場合でも画面に映らないところで、何が行われているかは分からない。したがって、1回の試験だけで評価するのは危険なので、日々の授業の中で、不正行為を行う余裕を与えぬQAを繰り返すなどして、個々の習得状況を地道に観察し、評価に結び付けるのがよいということになる。

学習者の立場から見ると、オンライン授業となれば、通学の必要がなくなるので、時間と費用が節約できることが大きなメリットではあるが、反面、大学に出てきて、他の学生との生の交流の機会を失うという大きなデメリットがあることに思い至らない学生もかなり存在する。また、学習者のIT環境が悪いと、オンライン授業が十分に受けられなくなるというデメリットもある。使用機器の不備により、オンライン授業の途中でいなくなってしまうことを繰り返す学生がいるのが現実である。さらに、留学生の中にはスマホの小さい画面で授業を受ける学生がいて、そういう学生は目が疲れると訴えている。

このように問題点はいろいろあるが、オンライン授業には優れた面もかなりある。特に学習意欲の高い学生にとっては、最適なツールである。今後は、その優れた面を活かし、工夫を凝らして、オンライン授業を使った学習効率の高い授業の確立を目指していきたい。